

「健康長寿社会に対応したまちづくりの計画・運営手法に関する研究」

(平成26年度～平成27年度) 評価書 (事後)

平成28年5月20日 (金)

建築研究所研究評価委員会

委員長 深尾 精一

1. 研究課題の概要

(1) 背景及び目的・必要性

急速な高齢化に伴い社会保障費が急増する中、我が国では高齢者が生き生きと暮らし、介護予防にもつながる、健康長寿社会に対応したまちづくりの計画手法と運営手法が求められている。

本研究では、高齢者が外出しやすく、生きがいの持てるまちづくり手法を、ハードとソフトの両面から検討することとし、前課題の成果としてとりまとめた「高齢者の安定した地域居住のためのまちづくりの手引き」を踏まえ、都市環境と高齢者等の活動の関係を、より詳細かつ定量的に分析することで、高齢者が生き生きと暮らし、介護予防にもつながるようなまちづくりを行うためのエビデンスを得ようとするものである。

(2) 研究開発の概要

アンケート等の主観データと、地域の立地条件等の客観データの分析を通じて、高齢者等の外出を促進する計画手法を検討する。また、高齢者等の生きがいや外出行動に好影響を与えられとされる地域活動への参加促進手法を検討する。

(3) 達成すべき目標

目標1. 高齢者等の外出行動に影響する都市・地域指標の抽出

目標2. 高齢者等の地域活動への参加プロセスモデルの構築

目標3. 地域活動による高齢者等の外出促進効果の解明

目標4. 高齢者等の外出行動を促進する計画手法及び高齢者等の地域活動への参加促進手法の開発と、それらを取りまとめた自治体や地域団体向けリーフレットの作成

(4) 達成状況

目標1. 過年度に実施した4市(7地区)約4千人のアンケート調査結果と、立地環境との関連を分析した。その結果、標高が低く商業集積が見られる地区では徒歩・自転車による外出(買い物行動)が多いが、標高が高く商業集積がみられない地区では自動車利用が多くなるなどの知見を得た。

また、横須賀市の計画開発住宅地3地区約1400人のアンケート調査結果から、戸建て住宅団地に比べて、集合住宅団地の方が高齢に伴う外出頻度の低下割合が大きいなどの知見、横浜市が実施する、よこはまウォーキングポイントの約11,000人分の8ヶ月間の歩数・活動量データと立地環境との関連を分析し、「人口密度」「店舗数」「集合住宅の割合」の値が大きくなるほど歩数が増加すること、「駅からの距離」「標高」の値が大きくなるほど歩数が減少すること、などの知見を得た。

更に、130都市を対象とする全国パーソントリップ調査の結果と立地環境の分析結果から、DID内の居住者の方がDID外の居住者に比べて外出率が約5%程度高く、1トリップあたりの移動時間が約2分長いこと、

などの知見を得た。

目標2. 防犯パトロールや見守りなどの安全・安心に資する活動を行っている5団体と公園や道路等の維持管理活動を行っている5団体の計10団体を対象に、高齢者の参加を促進するための工夫や活動を継続するための工夫、活動の苦勞などのグループインタビューを行った。加えて、各団体5名程度を対象として、活動参加のきっかけや経緯、活動の苦勞ややりがい、団体内での役割などについて個別にライフヒストリー調査を行った(1名約50分程度)。その結果をテキストデータ化し、質的分析法の1つであるGTA(Grounded Theory Approach)を用いて分析し、地域とのつながりの状況を起点として、地域活動への参加に至る道筋や活動からの離脱や継続への道筋を明らかにし、地域活動参加プロセスモデルを構築した。

また、地域活動参加プロセスの中で、その後の道筋に影響する重要な場面において、地域活動団体が行っている工夫について整理した。

目標3. 安全・安心に資する活動(防犯パトロール)や、公園・道路等の維持管理活動(清掃活動)等を行っている団体の中から3団体・41名を対象に、起床から就寝まで活動量計を身につけてもらい、地域活動参加時をはじめとする外出時の活動量と屋内の活動量を調査した(調査期間4週間)。

防犯パトロールは清掃活動に比べて活動時の1時間あたり歩数が約2.7倍となるものの、活動時の1時間あたり活動カロリーは約1.5倍に留まることなどが明らかとなった。清掃活動では歩数は増えなくとも、掃き掃除やトイレ清掃など上半身を主に使う活動でカロリーを消費しているためと考えられる。

なお、厚生労働省が定める健康づくりのための身体活動基準2013において65歳以上に求められる基準値(週あたり10メッツ・時)については、参加者全員が達成していた。また、1時間の活動がこの基準値に占める割合をみると、防犯パトロール活動は約15%、清掃活動は約5%の活動量であった。

目標4. 手引き作成のため、有識者による検討会を設置し、3回の検討会を経て手引き案(冊子およびリーフレット)を作成した。作成した手引きは、建研資料として出版予定であり、地方自治体や地域活動団体およびそれを支援する団体等での活用を想定している。そのため、図表を用いて分かりやすい表現を心がけ、専門的な表現をなるべく平易に言い換え、詳細は参考資料編に記載するなどの配慮を行っている。

特に、GTAによって得られた地域活動参加プロセスモデルは専門家で無ければ理解が難しいため、自治体職員や一般の地域活動メンバーでも分かりやすいように、「地域活動参加すごろく」という形式にアレンジするという工夫を行った。そして、活動の参加、継続や離脱に影響する重要な場面において、調査した地域活動団体が行っている工夫などを「処方せん」という形でとりまとめた。リーフレットについては、観音開きで見やすくレイアウトを工夫し、堅苦しくならないように写真やイラストの工夫を行った。

2. 研究評価委員会(分科会)の所見と建築研究所の対応(担当分科会名:住宅・都市分科会)

(1) 所見

- ① 超高齢化社会に向かう中、将来的に福祉関連の財政破綻が確実視され、緊急性のある研究課題であり、様々な主体との連携により推進され、成果の公表も着実に行われている。多様な調査手法を組み合わせで研究分析しており、緻密な研究フレームが構築されているが、調査研究相互のデータをどのように解釈すべきかについて慎重な検討が必要であり、既往研究等を参考に吟味する必要がある。また、今後は参加していない高齢者と参加している高齢者のライフヒストリーが時間の経過とともにどのような違いになっていくのかを明らかにする必要がある。
- ② 今回は街の防犯パトロールと公園管理を主に分析対象としているが、今日高齢者が取り組んで欲しい活動は多数存在しており、体と頭両方の健康長寿がどのように確保しうるのか、更に研究が必要である。
- ③ 研究成果として手引きと「参加すごろくと処方箋ガイド」が示されており具体的に良いと思われる。調

査対象団体ごとの特徴と活動の質・量の関係について分析し、フィードバックすると汎用性が高くなると思われる。

- ④ 活動の運営者が活用するツールとして意義深いのが、住まいの形態や街の計画・改善のための指針まで踏み込んだ成果を期待する。街や住まいに繋げる共通指針としてCASBEE-まちづくりやCASBEE-健康との関連付けが出来ると、事業計画、設計、計画改善に利用しやすいと思われる。
- ⑤ まちづくり活動参加者の活動量把握は多くの示唆を得られるものと考えられる。地域の空間特性との関係や、女性の活動量、活動に参加していない高齢者について、更に分析されることが望まれる。
- ⑥ 外出機会に関する調査研究と地域活動参加に関する調査研究との関係について、よりわかりやすい説明が求められる。今後の展開に期待したい。

(2) 対応内容

分科会における指摘を踏まえ、後継課題で調査研究を引き続き推進していくこととする。

調査研究の実施にあたっては、活動に参加している高齢者と参加していない高齢者の違い、より多様な地域活動への参加や活動の量や質、女性の活動量なども踏まえた分析を行っていくこととする。

また、まちづくりや住まいづくりの計画への貢献も視野に入れて取り組んでいくとともに、引き続き、より分かり易い情報発信にも努力したい。

3. 全体委員会における所見

長寿は良いが健康でなければという、社会的な需要が非常に高い研究で、一つ一つの調査自体非常によくできており、かゆいところに手が届いている。一般の方にも非常にわかりやすい形で研究結果をフィードバックできていることから、分科会の評価を支持し、全体委員会の評価としたい。

なお、得られた成果をどう展開していくか。一般の方々にも理解でき、なおかつ使いやすいよう工夫されているが、どういう場でどう使ってもらうかの努力が必要であると意見や、自治体や介護・医療の現場等々との連携を期待する、という意見があった。

4. 評価結果

- A 本研究で目指した目標を達成できた。
- B 本研究で目指した目標を概ね達成できた。
- C 本研究で目指した目標を達成できなかった。